

大原詣で

——平家懷古——

藤原弘道

みよやみよ都のふじの空晴れて月もうへなき秋の光を

（後水尾天皇御集——茸狩御幸の時叡山を御覽ありて）

その昔、都の富士を仰がれた靈嶽比叡の麓、八瀬の里を清流に沿うて南北に通する一條の街道がある。高野川があの水の暴威のために、そこから持ち出したか大きな石ころを、無雜作に散亂させたまゝ、未だ改修もせられず、昭和災異史の一頁を目のあたり物語つてゐる。加茂川の水、雙六の賽、山法師と並べ立て御嘆聲を漏らされた白河法皇のそのかみのこころも（平家物語）が想ひ起される。嘗て精神的道場として、靈氣しめやかに流れ、佛道修業に志すものゝ一度は必ず登らねばならぬ學府となつた比叡の山に、箕の水を汲んでは經を寫し、松籟の響にあはせては經を誦した聖僧達の眞實求道の面影が偲ばれる。そうかと思ふに、朝野の歸仰を專斷し、富む力むを勝ち得たこのお山にも、いつしか破綻の日が到來して、潤澤な經濟のみに喟集した無頼の徒の幾多の悲しむべき行爲や、宗教の本質からはるかに遠ざかり己が慾望を満たすため、都大路へ押し掛け、前後の見さからひもなく事を起した僧兵のものゝしい姿なきが、次から次へに一幅の繪卷となつて腦裡に展開される。

八瀬遊園地から徒歩二時間、動搖の多い自動車を殊更避けて、京情緒の一を表はす大原女で名高い大原村を北に、更に西に、山麓、石欄に圍れた大原西陵に参拜し、平家の哀史を今に傳へる寂光院のさゝやかな門をくぐる。

慶長年間、秀頼、淀君再建の本堂に詣で、平安朝後期（寺傳では聖德太子作と傳ふ）の大きな地藏菩薩や阿波内侍張子の像、建禮門院の御木像などを拜した。

思ひきや深山の奥にすまゐりて雲居の月をよそに見むきは

（建禮門院）

草簾竹床僅に風日を蔽ふのみであつた庵室の跡も、昔ながらの幽邃靜寂そのまゝの境地である。

後白河法皇が

池水に汀の櫻散りしきて波の花こそさかりなりけれ

と詠ぜられた庭の景色も、今は季を異にして一層閑寂である。

汀の池、汀の櫻、法華塔、寶篋院塔、阿波内侍の古墳、さては一木一石の微に至るまで、その古びたさまを見るにつけても懷古せられたのは源平爭覇のその昔である。

二

造寺造塔を唯一の功德と考へ、あはたゞしく頻繁に廻つてくる佛事、法會を佛教のすべてとあるさうしか考へてゐなかつた様に思はれる王朝人には、美しき殿堂を建て現世の不安と焦慮から、満たされぬ心の空虚から、解脱を求めるところによつて極樂の世界を眺めてゐた。道長の法成寺や頼通の鳳凰堂の如き、その代表的な文化的所産であらう。眞の求道者は殿堂の佛教であり、形式の佛教である寺を離れ、遁世せねばならなかつた。されば一切の現世的生活、浮世の束縛を捨脱して、人里を離れた山間幽谷に隱世し、そこに人生の安住所を見出し、念佛して極樂に生れんとするもの、或

は諸國を遊行巡禮して自らの聖なる生活を見出したものも少くなかつた。

それが五朝末期になるに、綱紀の頽廢、人倫の墮落、並に相次ぐ天災地變等によつて、さらぬだに消極的であり悲觀的であつた當代の人心をして、一層生活の不安と憂鬱を深からしめた。

西行は世の無常心にしみて屢々言つてゐるが、無常轉變憂喜の手のうらをかへす世の中（撰集抄）に於けるこの無常こそ、王朝末期の人々の心に映じた人生の姿であり、出家の動機でもあつた。そしてこの大原や嵯峨野の奥は都から程遠からず、然かも山勢蒼々として、風色幽かに、靜寂を慕ふ隱者の住居に適してゐるから、移り住んだものが殊に多い。

丹後守藤原爲忠の三子で、文學に造詣深い寂念（伊賀守爲業）、寂然（壹岐守頼業）、寂超（長門守爲隆）の三寂が或は保元の亂に係累せられ、或は思ふところあつて、洛北の霜厚きこの大原の奥に閑居の世捨人となつたことはあまりにも有名である。

「ときはの丹後の守爲忠朝臣の子きもこそ、三人ながら道心を發して、出家遁世して山住し、大原に籠り、靈山に居て侍りけれ。行のひまには和歌の道にてもいまだすてあへず、やさしき物から、其心の程貴くぞ覺えける。」（康賴 寶物集卷中）にて念佛修行の間に歌道に精進したことが傳へられてゐる。殊に寂念は皇太后宮大進にまで昇進し、大鏡の作者に擬せらるゝほどの文才を有してゐた。又寂然と西行とは、僧にして歌人、その境遇を同じくしてゐるので、互に交遊もあり、山家集にはその消息を窺ふことの出来るものが多くある。殊に西行が高野山よりつかはした十首の詠草及びそのかへしに至つては、名利を捨て、自然を友として隱棲者の靜かな心境を物語つてゐる。その一首、

山ふかみ窓のつれづれふものは色づきそむる櫨の立枝ぞ

西行

山かぜにみねのさゝぐりはらくにはにおちしく大原の里

寂然

歌僧の一脈相通するところがある。

或はまた、祇王、祇女の二人の姉妹は「萌え出づるも枯るゝも同じ野邊の草何れもか秋に遇はで果すべき」(平語)と一首の詠草を認めて、清盛の懷から遁れ、草深い嵯峨の奥に柴の庵を結んだ。その後を佛御前も慕つて庵に走り、緑の黒髪を切つた。所詮は自らの哀しむべき運命に對し、或は榮枯盛衰のこゝわりに世の無常を感じて、佛の世を慕ひ、聖なる永遠の生活の道を求めたのであつた。その他、當代に於て、重盛、小督、康賴、瀧口、横笛、文覺、維盛、さては鈴蟲、松蟲、能谷直實……等現前に展開する無常觀を見るにつけて、出家遁世した人々の如何に多かつたことか。

三

一體、道長に至り、此世をば我世と誇つた藤原氏の勢力は、自らの無氣力に加へ、院政が始り、地方武士の權力が次第に認めらるゝに至つて漸く傾きかけた。然かも保元平治の亂の末は、遂に藤原氏の權威地に墮ち、平氏の「一門にあらずらん者は皆人非人たるべし」(平語)と極言せられる時勢となつた。武家の興起を促したたのは、誠にやむを得ざるの勢である。

眼前に末世的な世相を見るにつけ、誰しも世の終末かと悲しみ、絶望的な人生觀を抱くに至つた。然かも單なる一平僧でなく、關白兼實を兄に持つ貴族僧慈圓が主張する末世澆季の思潮は(愚管抄)一般知識階級を風靡せずにはすむ筈はない。

人倫地を拂つた時勢に處し、いつぎんな不幸が到來するかも知れぬこの世に於いて、人々の心が現實的享樂の方面に走るか、さなくば一層すべてを離脱して、隱遁の生活に、せめての諦めの世界を見出すべく趨いたことに、何の不思議もない。現實的勢力を持続する上に、或は一身の保護の上に、都鄙おしなべて、武士の力をどれだけ頼りにしたこゝ

か。政治的にも、思想的にも、宗教的にも、道德的にも、言はゞ全く行き詰つた王朝末期の社會を革新すべき新階級の勃興は、國民のひこしく要望するところであつた。

崇徳天皇長承元年、院政時代の行詰りを建築に物語る三十三間堂が、落慶せるに當り、平忠盛はその工を督せる功によつて、内昇殿を許されたが、そのこゝは、當時下薦人ミ考へてゐた公卿達に、どんなに映じたことであらう。その後二十七年、平治の亂が濟んで僅かに八年、仁安二年には、清盛早くも従一位太政大臣に任ぜられ、武臣太政大臣の例を開いた。それが數年ならずして、一族公卿十六人、殿上人三十餘人、諸國の受領、衛府、諸司、都合六十餘人、日本六十六ヶ國、平家知行の國三十餘ヶ國、既に半國を超えたり（平語）てう榮華には全く驚くの外ない。

平家の異數の榮達は、言ふ迄もなく、藤原氏の故智に倣つて、皇室ミ外戚關係を結んだ結果に他ならない。そして又清盛はその數人の子女をして一人も武家へは嫁せしめず、悉く公家ミ婚姻關係を結んだこゝは、一門の公家化ミいふこゝに、如何に腐心したかと首肯されやう。尊脈分脈によるミ、清盛には九人の子女があつた。第一女は花山院左大臣（藤原）兼雅公室、第二女は高倉院中宮德子、建禮門院、第三女は高倉院准母、六條攝政（基實）北政所、第四女は大納言（四條）隆房卿室、第五女は普賢寺關白（近衛基通）北政所、第六女は修理大夫信隆卿室、第七女は後白河院女房、第八女は花山院左大臣家廊卿御方、第九女は出家。一人ミして武家へは嫁して居ない。貴族名門が富裕な武人ミ婚姻を結ぶミ言ふこゝは、史上常に繰返すミころの權力ミ富ミの結合であつて、兩者互ひに因縁を結んで利益を得んミするものであり、たゞへ、種々なる事情の然らしむるミころは云へ、貴族文化の衰退を示すものであらう。よし貴族の庶民化へ言へば言へぬこゝもないが、やがて室町時代に極勢に達した下剋上の現象の所謂萌芽ミと思はしめられる。

清盛の佛寺壓迫は時人の頭に如何に響いたか。興福寺、東大寺堂宇僧房の焼亡は、ここに罪業中の罪業である。この罪業によつて、清盛は次第に惡化して來る東國の形勢に心を殘しながら、惱みを重ねて死ななければならなかつた。兼實はその薨逝の日の日記に「就中、去々年以降、強大之威勢滿海内、苛酷之刑罰、普於天下。遂衆庶之怨氣答天、四方之匈奴成變。何況、魔誠天台法相之佛哉。只非堙滅佛像堂舍、顯密正教、悉成灰燼。師跡相承之口決抄出、諸宗之深義、秘密之奧旨、併遭回祿。如レ此之逆罪、無レ非彼之唇吻。倩案修因感果之理、爲敵軍亡其身、被懸首於才鋒、可曝骸於戰場、兎弓矢刀劍之難、病席終命。誠宿運之貴、非人意之所測歟。但神罰冥罰之條、新以可レ知。日月不墮地。爰而有憑者歟。此後之天下安否、只奉任伊勢太神宮、春日大明神耳。（玉葉治承五年閏二月四日）」言つてゐる。

罪業と言へば、大佛殿焼却の當事者重衡は禁囚の身となり、やがて奈良で、無情なる刃の露となつたではないか。それのみか、平家一門の人々の悲慘事を見聞するにつけ、時人をして諸行は無常であり、盛者は必衰の理である、今更のやうに慨嘆を漏らさせた。であるから佛教はまづ尊ばねばならぬと言ふやうな敘述をもつのが、平家物語の根底に流れる作者の思想ではあるまいか。さればこそ、念佛生浩に入つた建禮門院は、彌陀如來の來迎引接を得て大往生を遂げられたことを記して筆を洗つてゐる。

然し清盛にも彌陀信仰はあつた。藤原忠親の日記山槐記保元四年二月十三日の條に、

「參千體新阿陀堂、今日供養習禮也。先參院、次參御堂也。此堂者、先年亂逆之時、讃岐院出城南宮、繕烏合陣之地也。然官軍放火彼御所燒失了。近課太宰大貳清盛朝臣被建立也。佛者烏羽院御平生之時令造立給、未被建立御堂崩御了。三尺彌陀也。御周忌之間人々爲御追善造加、仍其數餘于千體云云」

と言つてゐるが、三尺の千體阿彌陀如來を安置信仰した清盛の行爲は、道長以來、數代に亘る信仰の影響とは言へ、熊

野や嚴島の信仰と共に、彼の彌陀信仰の一面を窺ふことが出來やう。

承安四年の春は早賊の日が続いた。百姓は耕作の煩ひを歎き大變困窮した。それで清涼殿では、五月二十四日から最勝講が始められた。山門の澄憲が龍神に祈願を籠めたところ、天地感應、大雨が三日三晩降り續いて、「説道の拔羣、當座の降雨、古今誠に類なし、御勸賞あるべきか」を攝政より奏聞せられ、上御一人より、下萬民に至るまで非常に喜んだのを、清盛は潮笑し、病人あつて、全治する頃醫師がそれを診て治療すれば早く効驗があり、之を醫師の診案宜しきを得たと言ふやうに、春の頃より早して、五月雨の降る時季を見はからつて祈り、雨が降つたからこゝで澄憲の祈禱の御蔭で、人々の沙汰するのはいさおかしい事であると言つてゐる。（源平盛衰記）

清盛のかくの如き態度は、彼の南都の焼討ちを併せ考へるべき、比叡山を焼討ちし、石山本願寺を數年戦つた織田信長と比較して、さこまでも現實的精神に生きんとする革新的な性格の相似する一端を見出すことが出来る。

五

平家の成功はその公家化したためであつたが、そのためにまた失脚もした。武人が弓矢を捨て、鎧を脱いで、名香の薫ゆかしい差異や直衣の優雅な姿に身を裏し、詩歌管絃を弄び、華柔に流れることは當然没落の道を辿らねばならぬであらう。平家の專横は、保元の亂に味方して戦つた源頼政さへ、遂にその暴戾見るに凌びす兵を起すに至つたではないか。歴史は見捨てられた小さい捨石が遂には重要な役割を演ずるやうな結果を齎すことが屢々ある。池の禪尼の情によつて死をのがれ、伊豆の僻島に流された頼朝のために、平家一門全滅の悲運を齎来しやこは誰かよく豫期し得たらうか。

抑々平家の没落は清盛の薨じた治承五年に始つた。壽永二年と言へばその後僅か二年である。九月五日の玉葉に、右大

臣兼實ですら「近日、京中物取今一重陪増、微塵之物、不_レ能_レ持_レ出途中。京中萬人於_レ今者一切不_レ能_レ存命。義仲院御領已下併押領、日々陪増。凡_レ縉素貴踐無_レ不_レ拭_レ淚。所_レ憑只頼朝之上洛云云」ミ言ふに至つては、最早平家は社會の指導的地位に立つべきものでなく、戦はずして既に人心離反の状態にあつたのである。それにしても、今を時めく平家の一門、畏くも國母ミして大官人羨望の的であつた半世の榮華が、一陣の源風に一たまりもなく、西海の波に漂はざるを得なかつたミは、一層亂世のはかなさを感じしめられる。轉變の迅速なる、時人が澆末の感を一層深くしたのも無理はない。

末法末年ミは言へ、時人は何を期待し、何を希望したか。言ふまでもなく、ひたすら古の聖なる時代を憧憬し、永遠なるものを望んでやまなかつた。事實永觀以後壽永の頃までの二百年間の間に、永又は長の字を用ひた年號が、甚だ多いのでもよく察せられやう。例へば、永觀、永延、永祚、長徳、長保、長和、長元、長曆、長久、永承、永保、永長、長治、天永、永久、元永、長承、永治、永曆、長寛、永萬、壽永等をあけるミが出来ゐる。然も永延、永祚、永長、長治、元永、永治、永曆、長寛、永萬の如き、長かるべき筈が僅々一年或は二年しか續かなかつたミいふミは皮肉ミ言へば皮肉である。

(中村直勝氏 岩波國史講座 室町時代の庶民生活 參照)

六

木曾義仲が入京して亂暴を働き、院の御所を襲つた罪は何ミ言つても遁れるミは出来ない。ミこもにたミへ源平兩政敵の私怨私憤に因るミは言へ、壇の浦で累至尊に及ぼし奉つたミは、誠に恐懼の至りに堪へざるミこゝいふべきである。

今ぞ知る御裳濯川の流には浪の下にも都ありこは

（源平盛衰記）

平家に續く源家も僅か三代二十八年で滅んだが、古來平家の哀れを語るもの多きも、源家の悲運を語るもの少きは何故であらう。それは平家が負けたからである。平家が弱かつたからである。事實頼朝の正統は三代で滅んだが、源家の一族は織田、豊臣の二氏を除き、明治維新まで天下の實權を掌握してゐた。一般武士にしてもその身源氏の末孫たることを喜ぶ子孫の多いことは、系譜に關心をもつものゝひこしく感ずるところであらう。

それにしても平家没落の後、時勢に慣り、自ら平家の出身を名乗ることさへ出来なかつた我が勢觀房源智上人の母を懷ふこき、一層あはれを増すやうである。

七

史の香ゆかしい大原の里は昔ながらの閑寂な趣を味はせてくれる。

「二月、三月の程は嵐はけしう、餘寒も未だつきず、峰の白雪消えやらで、谷のつらゝもうち解けず。かくて春過ぎ夏立つて、北祭も過ぎしかば、法皇夜をこめて、小原の奥へ御幸なる。」
（平語 小原御幸）

文治二年四月、後白河法皇御臨幸の御物語は、今も能樂のうちに取扱はれて往時を語つてゐる。

新しい文化の波は郊外の舊い自然を亡してゆく。然かしこの大原の里だけは人爲的文化の創建から取残してほしい。

八

私は中秋の一日、洛北の淨境、寂光院に詣でゝ、七百五十年の昔を回顧し、かつて壇の浦に遊び、阿彌陀寺陵に參拜し、赤間宮に詣でゝ、平家一門の人々の苔むす墓碑に、その哀詩を吊つた時のやうに、深い感慨に打たれた。